第374号
2020年
5月25日
毎月25日発行

げんぱつ

原発住民運動情報

発行所 原発問題住民運動全国連絡センター
発行人 中村敏夫／1部300円 年間3,000円
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町 2-11-13
MMビルⅡ402
TEL 03-5215-0577 FAX 03-5215-0578
郵便振替 00150-7-355202
ホームページ http://genpatu.com/index.html
メール＝genpatu-c@bizimo.jp

六ケ所再処理工場

規制委、必要ない施設を審査「合格」とは!?

核燃料サイクル政策は破綻
「負の遺産」積み上げてどうする!?

原子力規制委員会は核燃料サイクルの重要施設である日本原燃（六ヶ所再処理工場（青森県六ヶ所村）について十三日、新規制基準に「合格」したとする審査書案を了承した。しかし、これほど、国民の信頼を裏切る審査はない。

日本は原子力開発の当初から高速増殖炉を「将来の原子力の主流」と位置づける核燃料サイクル政策を進めてきた。しかし、高速増殖炉は、原型炉「もんじゅ」のナトリウム漏れ・火災事故（一九九五年）、その後、長期の運転停止を経たうえで運転再開を強行してまた事故に直面（二〇一〇年）して運転停止。結局、廃炉決定（一六年）となった。

日本の原発で生まれたプルトニウムだから「純国産エネルギー」と称し、「天然ウランのほとんどを利用できる」と原子力開発研究利用長期計画にウソまで書いて「夢の原子炉」とされた高速増殖炉開発は、民間も含め二兆二千億円（八〇～〇五年）の大浪費の上、大失敗に終わり、核燃料サイクルは破綻した。プルトニウムの使い道はなくなった。再処理で新たにプルトニウムを分離してどうするの？ 使い道のない施設の審査「合格」とは問題外である。

日本はプルトニウムを大量約四十七トンも保有。世界では日本の核武装の懸念が高まる。日本は「利用目的がないプルトニウムはもたない」と宣言し、世界の懸念をかわしているが、説得力はない。そこへ六ヶ所再処理工場（使用済み燃料年間八百トン処理能力）を稼働させれば、新たに年間八トンのプルトニウムを上乗せする。「負の遺産」の積み重ねである。

高速増殖炉の実用化時期を示せない政府は「軽水炉長期化時代」と称し、MOX（ウラン・プルトニウム混合酸化物）燃料を使う「プルサーマル計画」を掲げた。これも福島原発事故で原発の再稼働は厳しく、プルトニウム消費が見込めるものではない。

規制委の六ヶ所再処理工場の審査「合格」自体も問題である。

同工場は一九九三年建設開始。当初一九九七年竣工予定のもの。その後、竣工延期が二十四回も繰り返され、四半世紀余を経過しても竣工の見通しはない。建設費は当初七千六百億円と見込まれたが、新規制基準への対応費約七千五百億円を加えて約二兆九千五百億円にまで膨張した。加えて建設済みの施設は老朽化が目立ち、今後さらにコストが膨らむ公算大である。

規制委の審査で、この体たらくが審査・検討されたとは到底思えない。これは普通の審査で終えていいものではない。

政府は「もんじゅ」廃炉とともに「高速炉開発」を決定。「もんじゅ」後継としている。「増殖」抜きの高速炉は高速増殖炉とは似て非なるものである。ここでも新たなウソをついている。

○「東海第二」工事中止を！」（三面）
○「安心なき放出」戒め 処理水問題で意見聴取会合（四面）
○核兵器に七・八兆円 九核保有国の一九年関連予算（五面）

【お知らせ】「事故十年目を迎える福島現地を見る」全国交流集会は延期します。八面「編集後記」参照を。

警鐘

●「嘘は大きいほど良い。大衆は小さな嘘より大きな嘘にだまされやすい。なぜなら彼らは小さな嘘は自分でもつくが、大きな嘘は怖くてつけないからだ」――これはアドルフ・ヒトラーの言である●日本の原子力政策には「白」を「黒」とする類いの「大きな嘘」で塗り固められている。日本の原発立地は「世界一危険」なものであるが、「世界一安全」とされた。国民の多くは、福島第一原発事故という原子力災害を経験して「危険」であることを知るに至った●日本の原発開発には、多くの「大きな嘘」が埋め込まれ、国民がだまされてきた。国や電力会社と住民運動側との交渉は、これらの「大きな嘘」の告発であった。いまも原発運転差し止めや原発損害賠償訴訟では、それが争われている。これら運動の成果として、国民もそれを自覚し始めている●今回の規制委の六ヶ所再処理工場の審査「合格」話も「大きな嘘」の一つ。原発大事故を経験してから、その「危険」を知るというのでは犠牲が大きすぎるし、悔しい話である。原発問題の国と電力会社の言い分は、まず疑ってかかることが肝要である。